

西南学院専門学校卒業生 坂本譲氏に聞く

部史に隠れた歴史を掘り起こす

— 戦没者の記録 —

◇日本一のラグビー部

私が西南学院の専門学校に入学したのは1948年で、日本は太平洋戦争での敗戦を経験し、どん底から立ち上がろうとしていたときでした。その頃、西南は2年連続して全国高専ラグビー大会で優勝して、ラグビー部はもちろんのこと、学内をはじめ地域の人たちも意気が高まっていました。

私もラグビーの経験はなかったのですが、日本一のクラブに入ってやろうと思い、入部しました。入部当初は1年生で初心者ですから、水汲みやスパイクの泥落としなどの雑用と基礎練習ばかりできつい思いだけでした。特に合宿は遠くの宮崎県まで出かけて行き、それこそ朝からトコトン鍛えられて、本当に死ぬかと思いました。こんな遠いところで合宿するのは、途中で逃げ出さないためだったんですね（笑）。おかげで、基本が身につく、だんだんラグビーにのめり込みはじめたころ、その年も全国優勝し、三連覇を成し遂げました。

1949年、専門学校の2年生になったとき、西南学院大学が学芸学部として発足し、ギャロット先生が初代学長に就任されました。大学ができたことで専門学校



▲丹念に資料を集めて作成した部史の前に語る坂本さん

は募集停止となり、我々学生は専門学校がなくなるという寂しさはあるものの、「来年廃校ということは、全員卒業なので落第がない」ということに気がついて授業はサボってラグビー三昧でした。シーズンオフには、これもまた全国レベルの実績を持つ石丸寛先生指導によるグリークラブで歌いました。

学制改革により専門学校が大学に昇格するため、ラグビーの公式戦は1年間ブランクがあって、名称も全国新制大学ラグビーフットボール大会¹となり、1950年に新たにスタートしました。それでも見事に優勝を果たし、西南ラグビー部の強さを全国に知らしめたのです。もっともその試合には、同じ学校であれば専門

1 現在は全国地区対抗大学ラグビーフットボール大会と改称。

学校生も出場して良いということでしたので、私も全国大会に出場して栄冠を手にして優勝の小さなメダルが1つ残っていますけれども、深い思い出になりました。結局1952年まで6シーズン連続、これまでに全国優勝は9回を数えています。

◇学業を続けられたアルバイト

戦災で家も焼けだされて、日本育英会奨学金と大学の奨学金を借りることができて、おかげさまで学費はなんとか賄えました。しかしそれも最初だけで生活費が底をつきかけ、夏休みにアルバイトを探してアイスクャンディー売りを始めたんです。当時、学生がまだ始めていないものの方が有利で稼げるのではないかと思ったんですね。それで最初の売り上げで川端商店街に行き、「チリン、チリン」と鳴る鐘を買って自転車のハンドルにくくりつけて早速商売を始めました。ところがあにはからんや4日も自転車に乗り続けると尻が痛くなってとても座れない。立ったまま運転した一日もありました。考えた末、母校の修猷館で販売できないかと思い、学校の事務局に相談に行きました。そうしたら事務の先生から一喝され「県立高校でアイスクャンディーを売らせるなんてとんでもない」とにべもなく断られました。そこで翌日もお願いに行っただけで、「自分は修猷館の卒業生で、今は西南学院で学んでいるが、実はお金がなくこのままでは退学しなければならぬので困っています。修猷館でアイスクャンディーを売ることができれば何とかできるので、学業を続けられるかどうかは、先生にかかっています」と。そしたら、明日また来いと言われたので行くと、「今日から販売を許可する」と言われたんです。校内の独占販売ですよ。

うれしかったですね。本当にうれしかったです。バスケット部は30本、水泳部が20本、というように、競争相手がいないから、あっという間に完売しました。「これで進学できる」と思いましたね。そこですぐ西南学院に行って、同じように学費が足りないからと熱心にお願ひしました。もちろん一度だけでOKということではなく、3日目に許可をいただき、修猷館と西南学院の校内販売権を手に入れました。経済的な問題が何とか解決し、ラグビー部の合宿費まで稼ぎました。

◇三隅先輩とマダム山永

ラグビー部に三隅哲生という先輩がいました。修猷館の先輩で、一時出征して陸軍中尉となって復員し、西南学院に入られたんだと思います。軍隊の経験が良かったせいか、泰然自若としてきちっとしておられる、河野貞幹先生もほめておられました。その先輩が、今月で来られなくなるということで、どうしてですかと聞くと、戦犯容疑で警察に逮捕されるということでした。そのときは半信半疑でしたが、本当に捕まって、これは大変だとラグビー部の仲間といろいろ相談しました。「どうも南方戦線で米軍との間に何かあって、三隅さんはその責任者として原住民から告発されたらしい」と、その内容がだんだん分かってきました。ですが、どうして良いか分からない。とにかく救出のために嘆願文を書こうということになり、嘆願書ができました。さっそく英訳をと思いましたが、我々には力不足で英語の教授にお願ひに行っただけで、わずらわしいのか断られました。そのとき誰ともなく「マダム山永はどうだろうか」ということになり、マダム山永こと山永百合子先生にお願ひに行

きました。これまでのいきさつをお話して、英訳のため2、3日預けて帰ろうとすると、タイプの前に座って「どうぞお読みなさい」と言われました。不安を覚えながらも嘆願書を読み続け、終わると同時に「チーン」とタイプも打ち終わりました。朗読の日本語をそのままタイプする速さにあっけにとられ、次にその宛名を見て大いに驚きました。その宛名には「Mr. Douglas MacArthur」と書かれてあったんです。“General”もなく、嘆願書というより簡潔で率直な手紙という内容でした。それで早速差出人のギャロット院長に手紙の確認とサインをもらい、GHQに送りました。その結果、嘆願書が功を奏したのか、三隅さんは翌年、釈放されました。三隅さんにとって“マダム山永”は命の恩人といえるかもしれません。

◇ラグビー部80年のあゆみ

2000年のOB総会で佐々倉為成会長²から「ラグビー部は歴史と伝統があり、80周年を機に、リーグ戦の戦績などを整えて部史を編集しよう」という話になりました。ところが総論賛成、各論反対になりがちで、編集が進まない。私自身も関わりたくなかったのですが、同時にいま企画しなければ正確な歴史が埋もれてしまうのではないかという不安もありました。いろいろ悩みましたが斉藤守高先輩³の強いご依頼もあり、「よし、分かった。私がやりましょう」と手を上げ、各年代の情報収集からはじめました。特に斉藤先輩に感謝したいと思います。専門学校時代の詳細な記録をもとに、コピー



▲座っているのが坂本さん、いっしょに写っているのは同級生の満田譲二さん（1950年、平和台球場にて）

による手作りで『西南ラグビーの軌跡』という冊子を作成しておられ、これがなかったら新たな部史を完成させることができなかつたでしょう。他にも守田基定先生（元修猷館高校教諭で、大正末期より平成に至るまで九州地区のラグビーに関する記録、記事をまとめられた）や松井康秀さん（元西南学院中学部教諭。1927年より58年間、西南学院に関する記事を309冊に及ぶスクラップにまとめ、学院に寄贈された）、OB会長を始め役員、編纂委員のみなさん、関係各位の多大なるご協力により、2008年に『西南学院大学ラグビー部史—80年のあゆみ』が完成しました。

2 大学商学部商学科1960(昭和35)年卒業

3 専門学校高等商業科1949(昭和24)年卒業

◇特攻隊に西南OBも

各学年の資料を整理していたところ、物故者のなかで「戦死」という表記がしてあることに気がつきました。そしてその数が意外に多いんです。太平洋戦争末期、日本は兵力不足により、学生を繰上げ卒業させて徴兵し、それでも足りなくて在学学生を休学させてまで出征させる学徒出陣へと向かわせました。1943年10月の第1回出陣学徒壮行会は、明治神宮外苑競技場の雨の中、学生服にゲートルを巻き、銃剣を担いだ何万という学生の映像が浮かんできます。とともに同じグラウンドでラグビーに情熱を燃やした先輩が、こんなに多く亡くなっているという事実を知って愕然としました。これはラグビー部だけじゃない。体育会を含め西南学院全体で相当な数になると思いました。

それでラグビー部の部史がひと段落したところで詳しく調査してみると、1942（昭和17）、1943（昭和18）年のいわゆる繰上げ卒業により、57人の卒業生が出征していると『西南新聞』（第61号、1943年10月5日付）が報じていました。同じ紙面で29人の卒業生が戦没者として名前を載せられ、追悼式を行っています。そこで57人の卒業生の記録が残っていないかと学生課に尋ねたところ、当時はキリスト教撲滅運動もあり、学校を運営するのが精一杯で卒業生の動向まで手が回らなかったのではないかとという回答でした。ならばと特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会（東京の港区の芝）を尋ねて調べて調べさせてくれとお願いしたら、「厚生省で調べたら、情報がすべて集まっていって分かるはずだが、個人情報なので教えてくれない。民間の我々も苦勞していま

す」ということでした。そこで紹介されたのが、拓殖大学のOBで戦没者の調査に詳しい後藤明さんでした。後藤さんに陸軍関係のいわゆる特攻隊の戦没者を調べていただいたところ、西南学院の卒業生だと確認できたのは3人でした。それから、特攻隊の遺稿集『雲ながるる果てに』という本の中に「海軍飛行予備学生生徒戦没者名簿」があり、そこに16人の西南学院卒業生を見つけました。結局、特攻隊で19人が亡くなっています。ですから特攻以外で戦没した人も不明ですが、この特攻隊19人のなかに繰り上げ卒業して『西南新聞』に載った人が10人もいたのです。わずか1年足らずの訓練で特攻にいかねばならなかった彼らは、どんな思いだったのでしょうか。その青春を思うとき、また、ご子息を失われたご両親の心情を思うとき、涙があふれてきました。本当に痛恨の極みです。

それに加え、特攻隊以外でも福岡出身の兵士が多数出兵したガダルカナル島や硫黄島など、アジアの各戦地で亡くなった西南学院の関係者が多数おられるはずです。こういう方たちを弔いたいと考えいろいろ調べましたが、個人で調べるのは限界がありますので、西南学院当局、同窓会、百道会、西日本新聞などで協力して委員会を組織し、徹底的に調べたらどうかと思います。同時にその調査に基づいて1943（昭和18）年から1945（昭和20）年の戦死者を掌握し、最後の追悼記念式を行っていただけたらと思うのです。戦争や特攻隊などは映画やテレビの話ではなく、身近に起きていた歴史なんです。祖国のためにと戦地に赴き、志半ばで亡くなった西南OBがいることを今の若い学生さんにもぜひ知ってもらいたいと思います。